

オーストリア「皇太子」の日本訪問（4b）

フランツ・フェルディナント訪日日記
《1893（明治26）年8月2日～25日》（その4b）

渡辺 肇

倉敷芸術科学大学院人間文化研究科

（2008年10月1日 受理）

8月17日宮ノ下から東京を経て横浜へ（承前）

麹町^{こうじまち}²⁴²は東京市の1区をなすのであって現代日本の政府所在地である。というのは、ここには宮城のほかにも各省庁等の官衙^{かんが}²⁴³と公使館²⁴⁴を収容する建物が存在しており、かつて屋敷と呼ばれる諸大名の宿舍が江戸城を取巻いていた様に、これらの建造物は麹町区に叢生^{そうせい}している。

1872（明治5）年以来、新しい欧州の建設技術が普及した。その結果、公共建造物やその他の多くの建造物が英国や中欧の都市の現代建造物の様な印象を与えるのである。庭園の中に位置している御殿や邸宅の中には考えることが出来る総ての建築様式やその変形を目にする事が出来る。思いがけずある親王の御殿の純粋にゴシック風の正面を発見した際に、私は笑いを禁じる事が出来なかった。それにも拘らず直ぐ近くに日本の特色を有する住居が建っていたからだ。その様に東京のこの地域には建築術的な矛盾が露出しているのだ。この様な矛盾もより悪くはないだろう。例えばリンツ²⁴⁵の都心部に純粋な日本的街区が出現したとしたら、実直な上部オーストリア人は、欧州人が現在日本の提供する奇妙な対比を見て驚くのよりも、もっと驚く事になろうからだ。外国敵視の徳川家の將軍たちの居住地であったこの都市は既に20年前には横浜と鉄道で結ばれ、路面鉄道や電燈会社や電話や電気鉄道を有しており、実際に2回の大産業博覧会を既に済ませている事で文化が発展したと認められるであろう。しかし日本人達は、承知の上で、それら建築物の無国籍化を更に進めているのだ。日本人達は実際に風土に調和し、高度に発達した芸術と産業、人間自体と、その生活に密接に繋がった、かくも特色を有する建築様式を持っているのに！二本の刀を差した侍たちが街路から姿を消し、華麗な大名行列で先触^{ききふれ}の者が扇子²⁴⁶で合図をしながら「下におろう」と叫ぶ声が響かなくなってからは、人々はこの街にも異なった種類の衣装²⁴⁷を身に着けさそうとしている様に思える。欧州建築様式と石材使用の御蔭で当然の事ながら、東京が苦しんで来た火災の危険が減少している事が指摘されている。というのは、東京の歴史の一部分は炎^{ほのお}の中で書かれており、この街は繰返し灰燼^{はいぜん}に帰したからである。だから日本の諺^{ことわざ}では「火事は江戸の華^{はな}」²⁴⁸と言うのである。

幸いな事に私はこの華を見る様な事は無くて感じのいい庭園で輝いている華々を見たの

みであった。これらの華は様式どおりに手入れされていて、ここにはまだ古き日本が残っている。園芸の分野において日本人は明らかに保守的なのである。

我々はしばしば古き城を囲んでいる壕^{ほり}を渡った。そこには冬になると何千羽もの野生の鴨^{かも}が巣くう。鴨は宮城の壕では保護されているが、この街の他の運河では網で捕獲されている。

昼時には天皇皇后両陛下への表敬訪問が予定されていて、その為に正装を着用し土砂降りの雨の中を紫がかつた緋色²⁴⁹の馬車に乗り、護衛され、敬礼され、軍楽を吹奏され、万歳を唱えられながら宮城に向かったのである。その行路で外壕内に一ヶ所開放的な空地があった。以前にはきっと大名屋敷が立っていた所なのだが、今では昔の封建制度の栄光とは際立った対照である帝国議会の²⁵⁰議事堂が聳^{そび}えている。議会は既に1890(明治23)年に開設されたのだが、その2ヶ月後には議事堂から江戸の華が芽生えて灰の中に没してしまった。しかし翌年には再建されたのだ。ともかくも当地では議会主義は国民全体の共感を享受していない様に見える。しかし私が聞いた所では日本の社会では議事堂の火事の際には災害の間に議会が開会されなかった事に対して残念であるとの声が少なくとも広がっていたとの事だ。議事堂から遠からぬ所に海軍省の館が聳え立っていた。その建物は頻発する地震を顧慮すると非常に危険な高さにまで達している。²⁵¹以前の江戸城の城塞施設²⁵²を通過して宮城の庭に到着し、宮殿の前に我々が立ったのは、幾多の城門の下を通り抜け、砂利が撒かれた険しい上り坂の行程を乗越えた後だった。宮城は小高い丘の上にあるのだ。この宮殿は、以前將軍の御殿がたっていた場所に1889(明治22)年に建設されており、日本様式を含んだ巨大な木造建築物である。この古き日本の建物が倒壊し近代的な建築物に場所を譲るまでに何年掛かる事だろうか。²⁵³

階段のところで私を迎えたのは陸仁天皇²⁵⁴でフランスの軍服に酷似した日本軍の元帥²⁵⁵の軍服を着用しシュテファン勲章の大綬を掛けていた。天皇に供奉する高位高官たちは金モールで飾られた大礼服を着用したり²⁵⁶、軍服の正装を着用して²⁵⁷現れていた。この天皇は121代、他の数え方では123代の天皇であり1852(嘉永5)年の生まれで、1868(慶応4年・明治元)²⁵⁸年より統治している。天皇の目鼻立ちは北方地域の日本人固有の類型であり、精悍な風采^{せいいかん ふうさい}をしている。²⁵⁹天皇はその日に色々な問題に活発な関心を示したのだが、天皇は欧州の言語が流暢に話せる訳ではなかったので会話は通訳を介して行われ、意見交換は当然の事ながらスムーズには行かず残念な事であった。

若年にして困難な状況の下で統治権を獲得した天皇は旧体制下の教育を完全に理解した上で、日本を単に改革に導いたのみならず、この国を全く新しい基盤の上に置いたのだ。以前は、大政を將軍に委ねて、神として敬愛される存在として隠棲していた天皇にとって、多岐に渡る統治権を奪回し、封建諸侯や侍たちから特権を奪い取り、人民を分け隔てていた法的な身分差別を除去し、外国を隔離する体制を打破する事が、この大変革に於いて必要とされたのだ。困難な国内での激動を経過して、注視して到達すべき目標に日本を到達

させた、陸仁天皇の天運と断固とした決断力は全面的に認めるべき価値があるし、この様な卓越した業績を成遂げただけでも既に陸仁天皇に対しこの国の歴史の中で飛び抜けた地位が保証されねばならないのである。この近代化の成果がどの程度まで深く根を張って、人民の継続的資産に移行してしまっているのかの、最終的判断は今日の所では少ししか下されないのである。数千万人に達する国民に対して彼らが継承して来た国家的な、またそれと内的に関連している社会的な制度を廃止させるという偉大な過程が、まだまだ長い時間を掛けて確実に最後まで進捗しなくて、これに対する反動や、今までに達成した制度を部分的に変更する必要性が全く有得ないとは言えないからだ。しかしながら日本がアジア的な神権政治、専制政治の一群からは決定的に脱却し、文明国家との協調に参入していると言う事は既に大きく確定していると言っても良いのだ。この様な理由で、欧州諸国がアジアに於いて追求している権益と相違した場合に、日本は何時の日かひょっとすると、対外政策の諸問題に於いては、以前とは異なって計算されねばならぬ要因となり得るのだ。日本が欧州の立場に少なくとも間接的に影響を与え事が出来るかも知れないという可能性を排除する事が出来ないのだ。この様な事実は、日本の発展に向けられた努力の文字通りの望ましい成功と言えるのかどうか、ひょっとすると東方に文化をそんなに多くは齎すべきではないと言う警告にはならないのかどうか？

天皇は私を長い廊下を通して謁見の間に案内した。随員達は食堂に導かれた。謁見の間で美子皇后²⁶⁰が私を待っていた。皇后は非常に小柄ではあったが華奢で優雅な女性の姿をしており、非の打ち所が無いパリ風の衣装を身に着けていた。同様に欧州風の衣装を身に着けた女官達が皇后の周りにいた。

皇后は新しい関係を通して彼女に課せられた義務を称賛に値する様式で履行した事や、また女性の教育に気を遣っている事で、評判となっているが、藤原氏の一門である一条忠香の娘であり最高の身分²⁶¹の公家の家柄である。宮廷貴族である公家、この家系の一部、なかんずく藤原家は天皇家に起源を發して²⁶²その系譜を天皇と同じほど遡る事が出来るのである。²⁶³この家系は、皇后つまり天皇と同等の身分を有する者を、五つの最高の公家の家柄だけから選ぶ事が許されるのだ。それにたいして、より低い家柄の公家からは12人の側室、即ち、御典侍²⁶⁴が選ばれる事が出来るのだ。元来は最も影響力を有する階級であった公家は封建諸侯の所為で権力を失ったのだが、官位に於いては常に先行し皇族と同様に外出する際には牛車を用いる事が出来た²⁶⁵。天皇は美子皇后の他にも側室達を有しており、その1人である柳原愛子は1879(明治12)年に嘉仁²⁶⁶という名の子息を齎した。皇后には子供が無かったので1889(明治22)年には皇太子と宣言された。

天皇皇后と私は広間の真中に席を取り長い会話を交わしたが、その際に両陛下は特にウィーンに関して非常に正確な知識を持っていた。暫らくした後に丁度在京であった皇族の親王達や親王妃達が入室して来た。親王妃達には紹介の際に柔らかい手に接吻したが、その様な仕来りは未だ日本の仕来りに成り切っていない様に思えたのだが、直ぐに淑女た

ちに上手く受入れられた。

有栖川宮³⁵以外に小松宮彰仁親王²³⁷、閑院宮載仁親王²³⁸が現れた。閑院宮はフランスで教育を受けフランスの騎兵聯隊で隊付勤務を経験したので流暢にフランス語を話した。更に有栖川宮の董子妃^{ただしこ}の、その嫁の慰子妃^{やすこ}、小松宮彰仁親王の頼子妃^{よりこ}、閑院宮載仁親王の妃、最後に小松宮彰人親王の子息である依仁親王^{よりひと}の妃が現れた。最後に現れた妃は並外れて美しく魅力に溢れる女性であったが悲しき運命に際会していたのだった。と言うのは彼女の夫は結婚して僅か8日後にはシカゴから欧州を巡る1年の外遊の途に付いてしまったからだ。残念ながら私は彼女に私の同情の念を示す事が出来なかった。彼女は日本語だけしか自由に操る事が出来なかったからだ。

わが友の三宮が本日は式部長を務めていて午餐^{ごきん}を告げた。そして私は皇后に手を差出したが、我々の背の高さが余りにも違いすぎるので歩調を合わせるのもそうだが、若干難しかった。天皇は有栖川宮妃を導いた。我々は宮殿の長い廊下を通して歩いた。国歌が演奏される下で食堂に入場した。午餐会には40人が参列した。その中には我が公使館と総領事館の諸官や我が乗艦《エリーザベト号》のベッカー艦長と士官たちも含まれていたし、更には全閣僚と高級宮廷官僚達が参列した。私は皇后の隣に座った。皇后は私と非常に活発な会話をしたし、その会話には天皇も入ってきて、特に私の旅行の事を詳しく聴いた。皇后は非常に共感的な性格であって、真面目な方向に話題を向けようとしている様に思え、同席した他の女性達の様な陽気で朗らか性格を有していない様に思えた。この事は彼女の地位が、言われる様に、時には実に面倒な地位であると言う事と正に関連しているのかも知れない。

フランス料理の午餐は素晴らしかったし、飲み物も料理の達人の作品に相応^{ふさわ}しい逸品が連続して出て来たが、宴席音楽はこの午餐会に相応しい水準に完璧に達しているとは言えなかった。それに反してふんだんに金モールを付けた制服の召使達は迅速に手際よく給仕した。和服を着用した娘達が早足にちょこちょこ歩いて給仕した方が疑いも無く魅力的であったろうが。日本の宮廷に我々の宮廷の儀典が導入されていたので、私は故郷にいるかの如くに感じたのであった。ところで食事の楽しみが私にとってかなり不快な思いとなった。高い気温に苦しんだからだ。特にワインと、この様な風土には全く適していない私の軍服の正装の、所為^{せいゐ}でこの高温の作用が益々高まったからだ。午餐会の後に接見が行われ、私の随員諸官と日本側高官が紹介された。

それから小松宮彰仁親王と三宮に伴われて宮殿を見物した。宮殿は欧州の設備に日本の設備が結合されていて、並外れて豪勢であると同時に上品にも詭^{あつら}えられていた。廊下と部屋^{おほ}の壁は絹と金襴緞子の壁紙で覆われていた。大抵は京都の芸術織匠達による文字通りの名人の作品であった。天井は絵画と金箔で飾られ四角の格子で分けられていた。鏡の様に輝く寄木張りの床には欧州からの豪華な絨毯^{じゅうたん}が敷かれていた。謁見の間や、食堂や、控えの間に設置されている調度品は殆んど例外なく欧州のものであったが、それに反して装飾

物は日本の芸術と産業の生産物であった。宮殿の総ての部屋には電気照明が導入されていたが、帝国議会議事堂と同じ設備が損傷した事で灰燼と帰してしまっただけでは使用される事は許されず、現在は蠟燭だけが照明に用いられている。壁にはその目的で巨大に壮麗に製作され、ふんだんに金箔が貼られた青銅製の飾り職台が配置されている。

我々に宛^{あて}がわれた浜離宮には既に親王全員が訪問しており、多くの高官たちも名刺を残していったのであるが、私はそこに天皇陛下の訪問をも受けたのである。それに続いて私は横浜に戻った。夕刻には到着し、故国からはかなり離れて投錨している《エリーザベト号》に再び乗艦した。私は長時間にわたって士官たちと一緒に甲板に座ってこの間の体験を雑談し、印象を受けた事などを交換したのである。

8月18日、横浜から東京へ

総ての忠良なる臣民にとっての素晴らしき日だ。我々が最愛のこの上なく恵み深い皇帝陛下の誕生日なのだ。我々個人個人の心臓が今日はより強く鼓動するのだ。というのは、掛替^{かけがえ}の無い故郷から何千海里も離れているのに、我々は今日の祝日を故国の大地²⁶⁷で過ごす事が出来るという幸運を享受したのだ。我が人生で初めて、皇帝陛下の誕生日にオーストリアの外に滞在するのだ。そして、それだけに一層感動して、我々全員が敬愛する君主の事を思った。私だけではなく《エリーザベト号》に結集している陛下の臣民全員もそうだったのだ。愛する主君に対する我々全員が深く心に刻んでいる恭順の思い、その思いが常にそこに留まっていたい祖国の赤子^{せきし}一人一人の思いを満たし、内的な望みを極めたのだ。「神よ、皇帝陛下に長命を！ 神よ、皇帝陛下を守りたまえ！」²⁶⁸

朝の8時には21発の礼砲を発射し、満艦飾を施し大帆柱に親王旗を掲げた。その際、港内に在泊中の日、英、米、独の軍艦が親王旗に対して礼砲を発射したのである。海軍司祭が心温まりこの日の祝典に相応しい式辞を述べた礼拝には、私と私の随員の他にも我らの特命全権公使と公使館員、総領事、乗艦の士官たちと下士官兵の全員が参列したのである。テ・デウム²⁶⁹が歌唱され始めると又もや21発の礼砲が鳴響いた。

聖なるミサが終了した後に出席者全員と外国軍艦の全艦長の私への伺候が行われた。彼等は皇帝陛下の誕生日に際して御祝いの言葉を齋^{もたら}したのである。港内に強い風が吹いていたので、外国軍艦の艦長たちが乗って来た端艇を《エリーザベト号》に横付けるのはかなり困難な状態となった。

午砲が発射されるや否や直ぐに、又もや諸軍艦や陸上砲台から我らの祝日を祝う砲声^{とどろ}轟いた。午後2時には万国旗で飾られ、花や花綵^{はなづな}²⁰⁴で囲まれた庭園に仮装された甲板上で御祝の午餐会が開催され、私と士官達ならびに公使館の諸官が招待される事になっていたのだが、残念ながら開始寸前に強烈で嵐の様な暴風雨が降ってきて数分で飾りの一部を破壊してしまい、セットしてあったテーブルや甲板が水浸しとなってしまった。総じて昼の間は酷い天候となってしまっていたのは、横浜の北方に発生し、非常に荒狂ったに違い

ない、強力な台風の所為であった。と言うのは、私が皇帝陛下に恭順なる御祝の言葉を電報にて伝えようとした時に、電報の発信装置が台風の為に破壊されてしまっていると報されてきたからだ。港内の海面が既に非常に荒れていたのだから、この悪天候は公海上では強烈な勢いの波の山を発生させて荒狂っていたのだろう。

窮屈ではあっても台風に対しては安全である士官室にテーブルがセットし直された後で1時間遅れの午餐会を開始できた。私が皇帝陛下への乾杯を发声した際に万歳三唱の声が艦内に響き渡り、国歌の調べが鳴響く中を艦砲の音が轟いた。我々の中で深く感動しなかった者は恐らく誰もいなかっただろう。私が東京に出発しなければならなくなるまでの2時間を我々は一緒に快適に過ごした。東京では公使館主催の晩餐会とそれに続く夜会に私が参加する事になっていたのだ。我々が《エリーザベト号》を退艦する際には、風は風速6～7に強まっていて驟雨が降っていた。我々の端艇がまだ陸地に着ける事が出来た最後の端艇となった。他の軍艦の士官達は後で夜会に参加出来なかった。次々と波をかぶってずぶ濡れになり突堤に達し、1時間遅れで東京に到着した。

ある倶楽部²⁷⁰の大広間で開催された晩餐会には皇族の他に外国の外交官たちや高官達が現れた。シャンパンが供されると有栖川宮が日本語で我らの皇帝陛下に乾杯の辞を唱え、我々に通訳された。お返しに私が天皇に向けて乾杯の辞を唱え、クーデンホーフ¹⁷⁹によって日本語に訳された。

晩餐会が終了すると直ぐに大夜会が通告された。倶楽部ハウスの2階に招待客が集合した。この機会に外国の公使達や公使館員たちの大勢の人々が私に紹介された。当然の事ながら私の関心は朝鮮の公使館に集中した。その館員達が極めて独特の民族衣装で出席していたからだ。この衣装は僧侶が着用するような着色金襴緞子の衣服と、朝鮮人が脱がなかった、我々のチロル帽を思い出させる良質の馬毛から出来た被り物からなっていた。

8月の酷暑にも拘らず祝典の後で、音楽が奏でられ、舞踏会が催された。私は、完全な正装を着用し、大型十字勲章総てを佩用していたので、舞踏に没頭する事が出来なかった。儀礼的なカドリーユ²⁷¹1曲で私には充分であった。そのカドリーユには内親王方と外交官社会の何人かの女性が参加した。極めて面白かったのは三宮で、三角帽子²⁷²を手にして間断なく動きまわり、一人でメヌエット²⁷³を踊っている様に、総ての方向に向かって絶え間なく御辞儀をしていた。舞踏会はその後の夜食を伴うので祝典は深夜にまで及んだ。

8月19日、東京

本日に設定されている、街の西部に位置する大きな練兵場²⁷⁴で開催される、観兵式に出かける前に、種々な地位の日本側接伴員と一緒に写真を撮った。騎兵の護衛兵に先導され、儀装馬車に乗って観兵式場までのかなり遠い道程を進んだ。天皇は豪華に装飾され、金襴緞子が張られた天幕の中で既に私を待っていた。その間にいつもの煙草がかなり吸われた。7,530人からなる部隊は分列隊形ではなく方陣隊形を取っていて、その一辺は天皇

の天幕に向かい配置されていて、その他の辺は外交団、宮廷官僚、非番の将校たちに向かって開いていた。

天皇と私は既に準備されていた馬に乗り進んだ。親王達や陸軍大臣、外国の駐在武官達、数多の高級将校達が続いた。隊列側端から正面に沿って進んだ。歩兵は中隊毎に展開した大隊横列で、騎兵、砲兵、輜重兵は展開した横隊に立っていた。高級指揮官達は参列諸部隊の状況を申告した後に乗馬して天皇の行列に扈從した。

既に熊本で経験した様に、ここ東京に於いても、日本の軍政当局が短期で成就した成果に感嘆する機会を持ったのだ。この事は、日本政府が外国で派遣武官達を通して行われた、実り豊かな研究の功績である。彼等は他の列強諸国の武官達が時にはそうである様には厚顔では無く、彼らの平穩で慎み深い様式で、利点を把握し習得するのを理解しているのである。稀有な手腕で日本の軍政当局は、考えも無く猿真似をしないで、外国の制度を国情に適応させ実際に確実なものとする事を知っていたのだ。特徴的なのは外国で養成された将校達の姿勢から何処で彼等が軍事教育を受けたのかを容易く引出す事が出来た。例えば前に向いて颯張って行進する将校はドイツ軍の教育を受けたのだと直ちに分かる。柔らかな考え方が現れていてフランスの生徒であったと見分けられる将校とは明らかに違うのだ。

我々が正面を騎乗査閲した後に、分列行進が行われた。その分列行進は信じ難いほどうまく行ったのだが、しかし私なら聯隊での訓練で一つの欠陥を排除させるだろう。私の見解からすれば先頭隊列を方向転換させる命令が出されるのが遅すぎるのだ。それで側面の将校下士が知らず知らずのうちに突き進んでしまうからだ。その事で展開された中隊横列が見事とは言えない半月形になってしまうからだ。行進はある日本の行進曲²⁷⁵とオーストリアのラデツキー行進曲が交互に演奏される中で伸びやかに手を振って行われた。目立ったのは歩兵の高級将校たちが乗っていた馬の卓越さである。でも、彼等の馬術は馬に対応して相応しいものではなかった²⁷⁶。砲兵と騎兵は短いテンポの早足で分列行進した。騎兵1個中隊は非常に小柄な親王²⁷⁷が非常に大きな馬に乗って指揮していた。砲兵隊は非常に良く調整されていた。騎兵隊はそれに反していささか調子が外れていた。兵卒用の乗馬に去勢されていない牡馬が多数含まれていた事が原因であった。観兵指揮の最中に天皇の乗馬が騒ぎ始めると、主馬²⁷⁸が鞍から飛び降りて土を手一杯に掴んで馬の口と鼻に擦り付けた。私には全く初めての馬の鎮静手段だ。

輜重兵の最後の部隊が分列行進した後に我々は下馬した。天皇は別れを告げた。私は儀装馬車で浜離宮に戻り、短い休憩を取った後に、小松宮彰仁親王宅での午餐会に向かった。

親王と彼の家族、その仲には綺麗な親王の嫁もいたのだが、の他に15名ほどの客が集まった。午餐会主催者の親王は上機嫌で私の父の現況を尋ねた。親王がウィーンに滞在した際に父の所で食事を共にしたからだ。また、とりわけ我々が帝都ウィーンの思い出を語った。家族全員が私に対して本当に心が籠っていた。それでこの午餐会は無条件に

愉快な雰囲気でも過ぎたのだ。

午後は浜離宮の庭で三宮が手配した宮廷剣術学校の生徒達の演舞に吃驚させられた。この事で日本の古典的な剣術の特質を十分に認識出来たのだ。模範演技に於いては1刀対1刀、2刀対1刀、刀対槍、槍対槍が戦われた。刀と槍は強い竹を加工して出来ていた。針金が加工されて出来た面と、黒と赤の漆で塗られた胴と、脛当で剣士は防御されていた。腕と膝は覆われていなかった。それで幾人かには強力な一撃によって出来た傷が見られた。面、胴、小手、頸への一撃が勝負を決めるのだ。剣士達はやる事が誠に機敏であったから、彼等が修練を積んでいたのが分かった。フェイント²⁷⁹とパレード²⁸⁰は行われていない様に見えた。一撃に対しては大体に於いて体を運動させて、側面や、前面や、後方へ跳躍する事で回避したからだ。これに反して東洋の総ての民族に於いて一般的である戦いを鼓舞する叫び声が欠けていた。面白いハプニングが起きた。私を身体警護している主猟局属官が面をひよいと被り勇敢にも剣術を始めたのだ。試合が1回終わる毎に、審判が採点し、剣士達は膝を付き上体を地面につけて挨拶した。

この演舞の次には浜離宮庭園の汐入の池で魚釣りをしたが、結果は哀れなものでたった1匹の魚しか釣れなかった。今日の釣りを終えた後に私が聞いたところでは、皇后がここで時々釣りをするとのことだが、その様な場合でも釣りの成果は輝かしいものではないとの事であった。

そうこうしている間に、4時に予定されている天皇皇后両陛下臨席の晩餐会の時間となった。晩餐会は前日の午餐会と同じ手順で行われた。幸いにして早めの午後の時間の所為で大食堂はそんなに高い気温ではなかった。昨日の午餐会に招かれたのと同じ顔触れの客が現れた。睦仁天皇が乾杯の辞を述べて、その言葉を通訳が訳し、それから我国の国歌が演奏された。私も両陛下と皇族全員に対して乾杯の辞で答えた。勿論、その後には日本国歌が演奏された。晩餐会の後で私は皇后、親王方、親王妃方に別れを告げた。天皇は自分の通常の慣習を破ってもう一度浜離宮に私を訪ねた。この機会に、私が日本で受けた好印象に対し満足の意を述べた。記念にある日本人が発明し間もなく日本軍に採用される筈の連発銃²⁸¹の試作品を私に手渡してくれた。

本日の最後の食事となった浜離宮での夜食は豪華な庭園照明と花火の光景で味付けされた。庭園は帆掛け舟が点在する海を備えた眺望を呈するので既に浜離宮の大なる魅力なのだが、池に幾重にも反射する無数の提灯の明るい光と花火で際立った効果があったのだ。

夜食の際に一人の細工師が目付いた。彼は指を動かすのみで、殆んど信じ難いほどの速度で、べたべたとして蠟のように見える種々の色の米の塊^{かたまり}²⁸²から思うままのものをまねて作るのである。我々は彼に先ずは様々な動物を、ついで一人の日本女性を、最後に食事に参加していた一人の紳士を作らせたのだが、諸課題は完璧なやり方で解決されたのだ。

8月20日、東京から日光へ

私がミサに顔を出した小さなカトリック修道会教会の前にそこの修道女の教えている生徒達が立っていた。修道女たちは子供たちの教育を通して非常に沢山の良い事をしているのだが、子供達に対し賢明にも和服や、日本で一般的な挨拶や、その他の伝統的な慣習を無理に変えないでそのままにさせているのだ。小さな娘達は皆お揃いの着物を着せられていて実際非常に可愛かった。教会附属学校長は気品のある年寄りの女性であり、既に長期間役に立って有益な職務を務めながら日本に滞在している。親切なフランス人が務めているカトリックの東京大司教を尋ねた際に、大司教と同席していた神父達からこの国と民衆についての様々な興味深い詳しい話を聞いた。しかしながら残念なことに、日本に於いてはキリスト教の普及状況は期待した程の発展を齎していない。と言うのは日本人達がそんなに多くの宗教観を持っていなくて、大抵は非常に無関心であるからだ。

今まで多数の公式行事が詰っていたので東京の販売店舗を訪問する機会を見つける事が出来なかった。これは初めての自由な日である今日にこそ遅れを取戻さねばならぬ。街を移動した際にこの街の大きな部分を通り抜けた。私には驚くべき広がりや先ずはつきりした。つまり、東京は既に訪問した他の日本の都市に比べると独自性に於いては取り残されていると言う、第一印象は変らなかつた。到る所にヨーロッパ風の建物が、様式の統一も余り取れず、調和も取れていない様式で、目立っている。諸道路は、その一つは7kmもの長さであるが、長すぎて疲労させる様に作用する。

東京の店舗、とりわけ、外人向け土産店キョリオショップスは非常に多種多様な商品を提供しており、そこでは幅広い選択が出来る。本物の珍品が総て見つかったと思える程であって自分の所に持って帰ると、又もや新しい形や、全く知らなかつた商品が見つかるのだ。

総ての聖なる動物、とりわけ、龍が青銅や、漆器や、陶磁器や、木や、紙で作られて頻繁に現れるのだ。龍は日本の神話、象徴的表現、芸術に於いて卓越した役割を演ずるのだ。又、国家の紋章、即ち、図式的に構成された菊の花と天皇家の紋章、即ち、桐の葉と花で表現された紋章、に我々は頻繁に遭遇した。

ある店舗にいた時に突然大地が波の形に動くのを認識できた。壁が揺れて、水槽の水が飛び跳ねたのだ。明らかに私は東京を非常に頻繁に襲う地震の体験をしたのだ。適当な程度に、関心を引き付けるには丁度充分な程度で、しかも壊滅的には作用しない程度に、地下の力がその恐ろしい力を私に示す事なしには、私がこの場を立ち去れない様にしたのであろうと、私には思えたのだ。都心から離れた場所にいた我らの仲間の1人もこの地震に気付いたとの事だった。

東京には絹の布地が豊富にあると言うのに、残念ながら、それを買う為の時間は残されていなかった。と言うのは、まだ旅にでる前に東京ホテルに公使のピーゲレーベン男爵を訪問したからだ。このホテルは第1級のホテルで一人の日本人に属しており日本人によって経営されているのだが、英国やスイスのホテルと同等であると評価される事が出

来るのだ。

私は東京に滞在する短い期間を日本の劇場を見物するのに使用した。それは我国の大きなオペラ劇場の様に建築されている。入口に相對して大きな舞台があった。観客席は仕切席、平土間、天井桟敷に分かれている。仕切席と平土間は50センチほどの高さの板壁で四角い桟敷に仕切られている。各桟敷は4人から6人を収容する。ベンチや椅子は存在しない。この国の習慣でそこに座るのだ。仕切席の客は家族全員や仲間達で正午から夜の10時にまで及ぶ公演の長さ^{かんが}に鑑み自宅の様に対応して食べ物や飲み物を持参している。この劇場は約3000人を収容しており、これらの人々は男も女も喫煙している。到る所に火が付いた炭が入った火鉢が置かれている。マッチの軸が大抵は簡単に床に投捨てられる。消防当局の規則はそんなに厳しく無さそうだ。この実情は建物自体が木と藁と紙だけで建築されていると言う状況^{かんが}に鑑みたものなのに違いない。我々の国ではアーモンド・ミルクや、レモネードや、似た様な清涼飲料が一般的なのだが、この国ではその代わりに、御飯や、果物や、酒が売られている。盛んに振られる扇子や、子供の叫び声や、煙管から灰を落とす音が原因のざわざわした音が絶え間なく続く。この色々と変化する喧騒が芸術を満喫するのをかなり邪魔している。

かなり広い舞台は場面の轉換に対しては、種々の装飾を載せている回り舞台を通してのみ行われて、かなり原始的に設備されている。少数の楽師達から出来た小さな楽団が舞台の隣で2階の高さにある檻^{かり}の様な空間にいて、そこから我々の耳には旋律がないように聞こえる音が迫って来る。平土間の右側と左側に、その全長に渡って花道と呼ばれる二つの歩行板が舞台に繋がっている。これらは武装した一団の入退場と行進の為の場所を提供し、既に歩行板の上で所作^{せりふ}と台詞を演じ始めている役者に接近して見物する為に役立っている。長い休憩時間の間に、観衆の中の優雅な人々は隣接する芝居茶屋に移り芝居の続きが始まると^{ようや}漸く劇場に帰って来る。

(紙数制限のため続きは次号に掲載)

註

- 242 東京市麴町区は江戸城の外堀に囲まれた地域で、1947(昭和22)年に神田区と合併して千代田区となる。
- 243 役所、官庁。
- 244 当時の日本の諸外国との外交関係は公使の交換でなされており大使の交換はなかった。従って東京には外国の大使館は存在せず公使館のみが存在していた。
- 245 オーストリア北西部のドナウ川上流沿いの都市。上部オーストリア州の州都。ドナウ川下流のウィーンを中心とする地域を下部オーストリア州と呼ぶ。下部オーストリアの州都は長らくウィーンであったが1986年にザンクトベルテンに移転。
- 246 大名行列で先触^{ひき}の奴が用いるのは扇子ではなく毛槍なのだがフランツ・フェルディナントは大相撲の呼出の様に扇子を用いのだと誤解している。
- 247 人が洋服を着用するように、街も和風建築ではなく洋風建築が立並んでいる。
- 248 普通は「火事と喧嘩は江戸の華」と言う。
- 249 欧州では帝王や高位聖職者が使う色。それに習い日本では天皇や皇族の御料車の色。

- 250 1936(昭和11)年に現在の永田町に移転するまで帝国議会議事堂は麹町区(現千代田区)日比谷に所在した。
- 251 この建物は赤煉瓦作りで1階には海軍省を、2階には海軍軍令部(1933年には軍令部と改称)を収容していた。1923(大正12)年の関東大震災にも耐えたが1945(昭和20)年米軍の空襲により消失。跡地には現在は経済産業省が所在。
- 252 桜田門等であろう。
- 253 この明治宮殿は実際には1888(明治21)年に完成し1945(昭和20)年に米軍の空襲で消失した。その場所には現在1968(昭和43)年に完成した昭和宮殿が建っている。
- 254 1852(嘉永5)年生~1912(明治45)年没、明治天皇と送り名される。
- 255 正確に言うと大元帥の制服。陸軍大将の階級章に菊花が1つ追加されており、袖の線が1本多い。陸海軍大将のうち特に功労があった者に贈られる元帥と言う称号はフランツ・フェルディナント訪日時にはまだ存在せず、5年後の1898(明治31)年に創設され1945(昭和20)年に廃止された。
- 256 文官達。
- 257 武官達。
- 258 明治天皇が踐祚したのはこれより1年早い1867(慶應3)年1月9日。
- 259 いわゆる薩摩顔ではなく長州顔をしていると言う事か?
- 260 昭憲皇后、1849(嘉永2)年生、1914(大正3)年没。
- 261 摂政、関白に任せられる家柄で、藤原北家の子孫である、近衛、九条、二条、一条、鷹司、家を五摂家と呼ぶ。
- 262 例えば藤原氏の起源は天兒屋根命と伝えられ天皇家ではない。近衛家などでは皇子を養子に迎えたりしているので、天皇家に起源を発すると説明されたのであろう。
- 263 原文にはYanagiwara Aikoとある。
- 264 原文ではGo-tenschiと記載されている。tenschiは典侍の事であろう。典侍とは、明治以後は宮中の女官の最高位の者を言う。Goと言うのは丁寧の「御」か定員外に仮に置かれた地位を示す「権」のどちらかであろう。
- 265 例えば牛車宣旨と言う事があり、親王・摂政・関白などが宮中に参上する際に建礼門まで牛車で乗入れる許可の宣旨があった。
- 266 後の大正天皇、1879(明治11)年生、1926(大正15)年没。1912(大正元)年~1926(大正15)年在位。
- 267 故国の主権を有する軍艦の甲板の上で。
- 268 1854年からの1918年までのオーストリア国歌冒頭部の脚色。この国歌は最初はハイドン作曲の皇帝賛歌で、1797年に神聖ローマ帝国(ドイツ第1帝国)皇帝フランツ2世に捧げられたもの。19世紀にドイツ統一をめぐりオーストリアを含む全ドイツの統一を主張した大ドイツ主義運動の歌「ドイツの歌」はこの旋律を使用した。ホーエンツォレルン家のドイツ第2帝国では禁止された。ヴァイマル共和国が成立すると、エーベルト初代大統領が好んだこの「ドイツの歌」をドイツ国歌とした。現在のドイツ国歌も「ドイツの歌」だが、歌詞の第3節のみを歌う。この旋律はハイドンの皇帝四重奏曲でも使用されている。
- 269 "Te Deum laudamus"(神よ、汝を讃えん)で始まるラテン語の聖歌。
- 270 鹿鳴館。
- 271 4人一組で踊る社交ダンス。19世紀に流行した。
- 272 大礼服を着用した際に被る帽子。俗に仁丹帽と言う。
- 273 優雅なフランスの舞踏。1組の男と女が御互いに頭を下げあって踊る。
- 274 青山練兵場、現在は明治神宮外苑が所在。
- 275 現在でも陸上自衛隊の観閲式で演奏される分列式行進曲。
- 276 陸軍歩兵将校は徒歩区分とされていたが、例外として大隊長以上と聯隊副官、大隊副官の歩兵将校は乗馬区分とされた。だから馬術は歩兵将校の本職ではないのである。

- 277 閑院宮載仁親王、非常に小柄であった。当時騎兵大尉で第1師団騎兵第1大隊の中隊長としてこの観兵式に参加。
- 278 宮内省主馬寮の官吏。
- 279 フェンシング、ボクシング、球技などで相手を惑わし牽制するための動作。
- 280 フェンシング用語、自分の剣で相手の剣を払う防御操作。
- 281 村田式連発銃。1889（明治22）年に制定されたが性能は満足なものではなく、8連発ではあったが8個の予備弾薬を有する単発銃と言うべきものであった。1897（明治30）年の30年式歩兵銃制定に伴い代替された。1894（明治27）年に始まる日清戦争には近衛師団と第4師団にのみ使用され、1900（明治33）年の北清事変でも使用された。5連発の30年式歩兵銃は世界の先端水準に達することが出来、1904（明治37）年に始まる日露戦争でロシア軍を圧倒した。埃の多い満洲では遊庭に埃が溜まるのが欠点で、遊底に蓋いを付けた改良型の38式歩兵銃が1905（明治38）年に採用され大東亞戦争終結に到るまで使用された。
- 282 糝粉（白米を日光で乾かし、白で挽いて粉にした物）細工。

参考文献一覧（続）

- 66) 小沢朝江著、『明治の皇室建築』、吉川弘文館、2008年刊
- 67) 渡辺義雄著、『宮殿と迎賓館』、集英社、1980年刊
- 68) 浅見雅男著、『皇族誕生』、角川書店、2008年刊
- 69) 『別冊歴史読本』第32巻第18号、『華族歴史大辞典』、人物往来社、2007年刊
- 70) 上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修、『日本人名大辞典』、講談社、2001年刊
- 71) 新潮社辞典編集部、『新潮日本人名事典』、1991年刊
- 72) 村田修三総監修、『日本名城百選』、小学館、2008年刊

Erzherzog Franz Ferdinands Japan-Besuch 1893 (Teil 4b)

Hajimu WATANABE

*Graduate School of Science and the Humanities
Kurashiki University of Science and the Arts,*

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2008)

Am 17. August besuchte Franz Ferdinand Kaiser Meidschi im kaiserlichen Palais. Der Kaiser empfing Franz Ferdinand an der Treppe und geleitete ihn durch lange Korridore in die Audienzhalle, wo ihn Kaiserin Schoken erwartete. Das Kaiserpaar und er nahmen in der Mitte des Saales Platz und konversierten des langen, wobei die Majestäten sich über Wien sehr genau unterrichtet zeigten. Nach einiger Zeit traten die in Tokio anwesenden Prinzen und Prinzessinnen des kaiserlichen Hauses ein. Nachdem das Dejeuner angesagt worden war, reichte er der Kaiserin den Arm. Sie schritten mit dem Kaiser zusammen durch die langen Gänge des Schlosses in den Speisesaal, welchen sie unter den Klängen der Volkshymne betraten. An dem Dejeuner nahmen vierzig Personen teil. Nach dem Dejeuner kehrte er zu dem O-Hama-Goten zurück, wo er den Besuch seiner Majestät empfing. Abends kehrte er nach Jokohama zurück, wo er sich auf der »Elisabeth« wieder einschiffte.

Am 18. August feierte er den Geburtstag des Kaisers Franz Josef an Bord der »Elisabeth«, und nach dem feierlichen Dejeuner fuhr er nach Tokio zurück, um an dem feierlichen Diner als Gastgeber teilzunehmen.

Am 19. August inspizierte Kaiser Meidschi zusammen mit ihm die Parade der japanischen Truppen auf dem großen Exerzierplatz im Westen Tokios. Er besuchte des Prinzen Komatsus Palais zu einem Dejeuner. Der Prinz erkundigte sich lebhaft nach dem Befinden seines Vaters, bei welchem der Prinz gelegentlich eines Aufenthaltes in Wien diniert hatte. Das Gala-Diner fand nachmittags um 4 Uhr im kaiserlichen Palais statt. Nach dem Diner verabschiedete er sich von der Kaisern, den Prinzen und Prinzessinnen. Der Kaiser machte ihm gegen die sonstige Gepflogenheit noch einen Abschiedsbesuch im Hama-Palais und sprach bei dieser Gelegenheit die Befriedigung über die günstigen Eindrücke aus, die er in Japan empfangen; zur Erinnerung übergab der Kaiser ihm das Modell eines Repetiergewehrs.

Am 20. August besuchte er, vor seiner Abreise vom dem Ujeno-Bahnhof nach Nikko, eine kleine katholische Kirche, die Läden Tokios, das Tokio-Hotel und ein japanisches Theater.